

新しい風を 吹かせていきます

岐阜駅前問屋町エリア「魅力再生」キーマン 武藤昭成氏

かつて「日本一の繊維問屋街」と言われた岐阜駅前繊維問屋街。しかし時代の移り変わりとともに、シャッターを下ろす店が目立っているのが現状です。そのなかで今、まち全体に「新しい価値を生み出す」と、多方面に奔走する人がいます。武藤昭成さん、49歳。老舗呉服屋三代目が、問屋町エリア、更には岐阜市の「魅力再生」へと、いよいよ本格的に動きだしました。



んは本格的に動き始めました。

空き店舗に、子どもたちの笑顔を「放課後等デイサービス」

そのひとつが、放課後等デイサービス事業。

「もともと子どもが大好きで、親戚や周りの子の面倒をみていました。青年会議所時代に、子ども教育について一年勉強させてもらい、多くの気づきを得ることができ、子どもたちに対する思いや考え方が変わりました。そ



放課後等デイサービス「かるみあ」にて

なで岐阜を盛り上げて、自慢のできる街にしていきたいと思っています。それでも衰退のスピードの方がまだ早く、なんとかここで食い止めたいなと思っています」

地元若者たちの個々の力を「繋ぐ」のが、私の役割

「まちをつくっていくのは、次世代の子ども達、そして“やる気”です。共感してくれる仲間を増やして、まち全体が豊かになる仕組みを作っていました。問屋町で商売、モノづくり、何かのラボをはじめめる人、発信基地にする人等々、様々なムーブメントが起ることを期待しています」

更に、武藤さんはこう続けます。「ここから、ここならではの形を模索し、発信しながら、もう一度、まちの賑わいを取り戻し、日本中、世界中から注目されるまちを目指していきたいです」

「人」という個々の点を線に、線を面にと、繋いでいきます。

武藤さんの描く、地方創生への青写真です。

でに減少していきました。

「戦後の岐阜の復興の中心となったこのまちには、全国から人もお金も集まってきました。しかし今や、業界の輝きやまちの賑わいは消えようとしています」

そう、時代の移り変わりを肌で感じてきた武藤さんは、「岐阜の顔」とまで言われた問屋町がもう一度人々の活気に満ちたまちとなるために、日々考えを巡らせてきました。

「よかった頃の姿を取り戻したいとは考えていません。問屋街を維持しながら、変えていく。私たちは今、よきものを継承しながら新たな取り組みを行っているかなければならない、それが今いるわたしたちの責任です」

そんな強い想いを抱き、今年武藤さ



問屋街(昭和50年)

しかし時は流れ、小売業の流通形態の変化から卸業は減少、消費者の嗜好の多様性とともに問屋町は廃業が相次ぎ、最盛期には2,000社ほどだった組合の会員数は、160社を切るま

店があるのが嬉しくて、自慢でした。ファッションショーにもモデルで出たことがあるんですよ」

そんな華やかかなりし時代の問屋町の風景が今でも嬉しい思い出だと、武藤さんは満面の笑顔で語ります。

“何とかしたい”と自ら率先して活動している力強い仲間たちができました。その一人が、Tonya EXPO代表の林さんです」

林さんは、武藤さん同様問屋町への誘致を呼び掛けていくなかで、なかなか魅力を伝えるのは難しいと感じ、それならば皆が気軽に交流し、声掛け合えるような場所をつくらうと、自らカフェを出店しました。



武藤さん(左) Tonya EXPO代表の林さん(右)

「カフェを通じて、その時々の問題や課題を蓄積して、繋げていこう考えています。林さんのようなやる気のある若者がどんどん集まってくれることを願っています」

武藤さんと林さんは「カフェにきたことをきっかけに、問屋町が新しい世代の人たちにも関心を持たれ、岐阜でも何かができるかもって、一緒に盛り上げてくれる人が出てきたらうれしい」と期待しています。



問屋町にオープンした「ベリンゲイカフェ」

今後は、より利用しやすい環境となるよう近隣に店舗を増やすなど、この先の展開についても休むことなく描き続けていきます。

空き店舗に、交流の場を「カフェ」

「私と同じように、このまちを憂い



放課後等デイサービス「かるみあ」にて

のきっかけもあって、柳ヶ瀬でお化け屋敷をはじめました。子どもたちの遅く元気な姿を見ることやまちに賑わいが出来たことを嬉しく思います」

そんな活動を通じて、自然に子どもの育成にかかわることがしたいという気持ちが芽生えはじめた頃、武藤さんはこの「放課後等デイサービス事業」を知りました。一気に興味を持ち、実際に働いている友人に、いろいろと教えてもらうようになりました。

「具体的にはじめようと思ったのは、その友人の施設がコロナの影響で廃業されることとなったのがきっかけです。利用者の方々、保護者の方々、また従業員の方のことを思うと心配になり、いつかはやりたいと思っていてこの事業を、チャンスと思い引き継ぐことを決断しました」

「私と同じように、このまちを憂い